HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	談話の構造におけるスラブ語の指示詞の照応機能について
Author(s)	三谷, 恵子; Mitani, Keiko
Citation	スラヴ研究, 38, 17-36
Issue Date	1991
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5195
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113326.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

談話の構造におけるスラブ語の指示詞の照応機能について

三　谷　恵　子

本論ではいくつかのスラブ語において照応の機能をもつ指示詞が，文連続としての談話が有意味な言語テクストとして成立するために果たす機能について考察する。

照応に関してはこれまで，(1)文の枠内での照応表現の現われ方の研究，(2)同一指示という観点からの研究，(3)談話構成の観点からの研究，が試みられてきた。(1)は特に生成文法において，当該言語の文法規則から文内照応の文法的適格・不適格性がどう導きだされるかが研究されてきた。(2)については言語哲学的立場から，意味論的アプローチが試みられてきた[1)]。また(3)は文文法から談話文法へと言語研究の対象が拡張されるに従って注目されてきた領域である。

特定の名詞（句）ではなく，先行する文連続の内容を受ける照応（「文脈照応」とする）の仕組みを考えることは究極的には人間の談話構成能力を問うことである。その際，ある特定の言語に特有の照応のパターンがあるかどうか，という問題も重要な意味を持つ。そこで，本稿では文脈照応がスラブ語においてどの様に実現されているか，という点を，その際照応表現の中心となる指示詞の文法的・語用論的機能に注目しながら考察する。

本稿の考察の順序はつぎのとおり：

Ⅰ　テーマおよびハイパーテーマについて。

Ⅱ　指示詞の種類と文法的機能。ロシア語，セルビア・クロアチア語，スロヴェニア語の指示詞の体系について。

Ⅲ　テーマ・ハイパーテーマの照応の階層的区分と指示詞による照応を巡る問題について。

Ⅰ　テーマおよびハイパーテーマ

談話の構成をモデル的に考えるために，いくつかの用語を設定する。

テーマ(T)およびハイパーテーマ(HT)：有意味な発話の単位としての個々の文には最低一つのTがある，とする。ここでいうTには次のような非形式的な定義を与えて置く。即ち，文のTは，文を一つの情報単位としたとき，情報の中核となる命題的内容で，固有名詞によって指名される特定単一の対象のこともあるし，「AがBであること」と言うような定言文，あるいは「AがDすること」「AがCにMをあたえること」のような，表層の表現に近い形の命題となることもある。一つの文に2つ以上のTが含まれてよく，このときT間に，一方が他方を内包する，というような論理的階層的関係があってもよいし，「Xであること」と「YがZであること」のようにT同志は直接関係を持たなくてもよい。

このとき，文連続からなる談話のレベルで「ハイパーテーマＨＴ」を想定することができる。これは複数のＴを含む，あるいは複数のＴを結ぶ，より上位の談話構成の意味の単位と考える[2)]。ＨＴは階層的であってよい。すなわちいくつかの文のＴを統括するＨＴがあり，その上位にさらに複数のＨＴを統括するより上位のＨＴがあり……という形で談話が形成される。ＨＴは上位になるに従って抽象化・一般化されることが有り得る。逆にＴがＨＴに組み込まれるプロセスにおいて個別化，具体化するプロセスは無いように思われる。

ＨＴは予め用意されていることもある。場合によっては明示的に示される（「これこれについて今から語る」，というように）。

新聞記事の見出しはしばしば，ＨＴを象徴的に表現している。逆に，話者自身も明確に意識していないときもある。話者が自由な想起に基づいて語るとき，時として地滑り的な話の脱線的展開が生じる。この場合のＨＴは刻々移りゆくものである。とはいえ，一定の想起の連鎖が存在し，なんらかの，より上位の統括的なＨＴが存在すると考えられる。

談話を構成する全ての文のあらゆるＴがＨＴ形成に寄与すると考える必要はない。ＨＴ形成にきわめて重要なＴがある一方で，挿入的な，ＨＴとの関連性に置いてさして重要でないＴがあってもよい。また，発話の文連続の通りにＴが線形に結ばれるわけではない。従って，聞き手はＴ間の関連性，ＴとＨＴの関連性を考慮しなければならない。談話（テクストといってよい）の展開に不可欠なのは話者による新たなデータ＝文の追加である。聞き手はこれを現象・事実の報告，話者の評価（価値判断，非難，賛同，共感，賞賛など），話者自身の見解などを区別しながら受け取る。語られる内容が事実の報告か，評価かはしばしば述語の意味や形式（様相など）によって示される。

Ｔ・ＨＴのリンク：ＨＴの理解にはＴ同志あるいはＴ，ＨＴがどうリンクされるかを把握することが必要である。リンクにおいて重要な指標となるのは接続詞や副詞，それに照応表現である。

前提：本論では前提 presupposition という言葉を，文・談話を理解する上であらかじめ聞き手，話者の双方において共通に理解されているさまざまな事柄，の意味で用いる。従ってここで言う前提は経験論的な性格を持つ。これはまた，いわゆる Grice の会話の共同原則 (the cooperative principle) でいうところの慣習的含意 (conventional implicature) および非慣習的／会話上の含意 (non-conventional/ conversational implicature) と近い意味を持つと考えもよい[3)]。ここには，語られる事柄の背景（社会的，あるいは話者の個人的），談話が生成される必然性を生じさせる状況，一般的常識，さらに当事者において文の発言以前に自明ななんらかの約束ごとなどが含まれる。こういった前提なしには，談話の中で与えられる言語情報，文の要素に含まれる内容は「前提」とは見做さない。

また，含意 (implication) という言葉はある発言，文，命題などが与えられたときにそこから推測できる事柄，明示的には示されていないが必然的に帰結される命題などを指すものとする。

言語知識：文を適切に作成・理解するためには最低限，言語の知識（辞書的および文法的知識）が不可欠である。

T／HTの理解が話者・聞き手の間のもっとも重要な課題である。聞き手は，話者の作成する文を，言語知識に基づき，前提および先行文脈までに与えられた談話の言語情報を参照しながら理解する。さらに様々なリンクの目印によってT／HTの展開を把握する。このように，T／HT理解の中心となるのはT／HT間のリンクであり，ここにおいて照応関係は極めて重要になる。

Ⅱ

Ⅱ－0　この章ではいくつかのスラブ語における指示詞の体系と機能分布について概観する。スラブ語には指示詞が基本的に近遠の意味対立に基づく2項体系をなす言語（例えばロシア語：этот／эта／это：：тот／та／то; ブルガリア語 този／тази／това：：онзи／онази／онова）と，一人称＝話者，二人称＝聞き手，三人称＝第三者という人称の対立）に対応した3項体系をなす言語（例えばにセルビア・クロアチア語：ovaj / ova / ovo ：：taj / ta / to ：：onaj / ona / ono) に別れる。ここでは前者の例としてロシア語，後者の例として南スラブ語に属するセルビア・クロアチア語，スロヴェニア語を取り上げてそれぞれの指示詞の文法的特徴と機能を見る。

指示詞には直示と照応の機能がある。これをそれぞれ DIX, ANA とし，語彙素としてのそれぞれの指示詞は [этот] [тот] ; [ovaj] [taj] ; [ta] [tisti] のように表すす。

形態・統語論的にみて指示詞は，単独で用いられる指示代名詞（日本語の「これ・それ」にあたる），名詞又は名詞句 (N / NP) に限定詞として付加され，この連辞的結合が先行詞の N / NP の照応形となる指示形容詞（「この，このような」など），時・空間や様態に関わる指示副詞（「このように」「あそこで」）に区別される。

指示形容詞が用いられる場合，指示詞と共に用いられる N/NP によって，指示対象あるいは指示の範疇は明示的に示される。このとき，N/NP は 1）先行詞と同一の語彙；2）何らかの代替表現，のどちらかである。後者はさらに a）先行詞の表現の，辞書的な類義語；b）先行詞の指示対象に対し，より上位の概念，範疇を表す表現（個人名から「この人」；「薔薇が咲いている。この花は……」のような）；c）先行詞の指示対象，指示範疇の属性を表す表現，ただしこの属性は文脈においてのみ関連づけられる，のいずれかになる。

先行文脈・談話の一部もしくは全体，あるいは直前の文の内容に対応する場合，即ち T/HT に対する照応形であるとき，指示形容詞と共に用られる N/NP は新たに採用される表現である。

指示代名詞の形態は指示形容詞の中性単数形と同形となる。従ってこれはロシア語 rs. で [это], セルビア・クロアチア語 s-h. [to]，スロヴェニア語 sl. で [to] である。

ANA とDIX の基本的な違いは，DIX の場合，指示対象が話者の眼前に存在することがその基本的な使用環境となるのに対し，ANA は文脈の中に指示対象が存在する点である。指示詞の純粋に直示的機能は，聞き手の意識に，今目の前にある特定の対象を新

たな"語るべき対象"として喚起することにあると考えられる[4)]。しかし一方，DIXによって指示される対象が必ずしも新たに喚起されるものであるとは限らない。すでに話題化された，ある対象への再言及である場合もある：

201) Степь ! Где–то за оврагом дорога к ней. Во–он идут волы, будто на месте топчутся. Нет, сюда вам нельзя. Почему этот мужчина на моего сына похож ? Может быть, это он ? Или тот, который должен встретить меня и проводить ?

[А. Ким, Лотос, 53]

これは瀕死の母親が目の前の人物（息子）を指して言う場面である。この場合の指示代名詞 это は DIX/ANA の双方を果たすと考えられる。上に述べたような，目の前にある対象を新たに喚起する＝談話の構成要素として取りあげることが，最も基本的な直示の機能であり，その対極に純粋の照応＝完全に文脈上の操作があるとするとき，２つの極の間にはおそらく，連続的な，双方の機能の重複する範囲があると考えられる。話者の目の前に直示すべき対象が存在しないとき，指示詞の機能は純粋の意味で直示では有り得ないが，それでも直示的な指示で有り得ることがあるし，逆に先行詞が先行文脈に明示的に存在しない照応の場合もある（話者の意識の中にのみある，というような場合）[5)]。

Ⅱ－１　ロシア語の指示詞

ロシア語で指示詞 (Указательные местоименные слова) と呼ばれるものには，этот, тот, такой, таковой (устар, офиц), таков (в значении сказуемого), экий, экой, этакий (разг.), сей, оный (устар.) ; столько, настолько ; здесь, там, тут, туда, оттуда, потому, поэтому, затем, оттого, тогда, так, этак, (разг.) эдак (разг.) がある[6)]。

これらの指示詞は [этот] – [тот] に代表されるように，２項体系をなす：

202) Вот этот стул удобнее. – Я возиму вон тот костюм[7)].

ロシア語においては，DIX - ETOT と DIX - TOT の対比は語義的な差異に反映される。このとき，発話の意味を変えずに相互を入れ換えることはできない。一方，ANA としては [этот] が優先的，中心的に用いられ，[тот] は直前の N/NP より遠い位置にある名詞（句）を指示する場合，先行詞の曖昧さを避ける場合など，特定の状況で [этот] との対比において用いられる：

203) Еще одна трудность : большинство рабочих мест, которые может предложить Центр, – в деревнях. Это не всех устраивает. Например, к приезду армянских беженцев были подготовлены дома в деревне, протоплены печи, приготовлена еда, но те уезжали тут же. Они были настроены на городскую работу.

[Огонек No. 31 1990]

さらにもう一つ困難があります。中央が提供できる働き場所の大部分は田舎なのです。これは誰にとっても都合がいいというわけにはいきません。たとえばアルメニア

からの難民の到着に備えて村にアパートを用意し，暖炉を暖め食べものを用意しましたが，彼らはすぐにでていってしまいました。町の仕事をしたがっていたのです。

つまり ANA - ETO と ANA - TOT の対立は機能分布上の対立であり，このとき [ЭТОТ] が中心的，[TOT] が補助的，周縁的位置にある。

Ⅱ－2－1

次にセルビア・クロアチア語，スロヴェニア語の指示詞についてみる。

セルビア・クロアチア語，スロヴェニア語の指示詞は共に 3 項体系をなす。その格形態を taj, ta を例に表 1 に示す（ただし dl は双数，スロヴェニア語のみ）：

表 1

		s－h			sl.		
		M.	Ž	S	M	Ž	S
sg.	N	taj	ta	to	ta	ta	to
	G.	toga, tog	te	toga, tog	tega	te	tega
	D.	tom (u/e)	toj	tom (u/e)	temu	tej, ti	temu
	A.	N または G	tu	to	N または G	to	to
	I.	s tim/time	s tom	s tim/time	s tem	s to	s tem
	L.	u tom (u/e)	u toj	u tom (u/e)	v tem	v tej, ti	v tem
dl.	N.				ta	ti	ti
	G.					teh	
	D.					tema	
	A.				ta	ti	ti
	I.					s tima	
	L.					v teh	
pl	N.	ti	te	ta	ti	te	ta
	G.		tih			teh	
	D.		tim			tem	
	A.	te	te	ta	te	te	ta
	I.		s tim, tima			s temi	
	L.		u tim (a)			v teh	

これらの指示詞は，話者＝1 人称に近いものが [ovaj] － [ta]（この），聞き手＝2 人称に近いものが [taj] － [tisti]（その），話者・聞き手から遠いもの＝3 人称が [onaj] － [oni]（あの）と割り振ることができる。とはいえ，この 3 項対立はあくまでも話者が対比を意識している場合に有効であり，そうでなければ対立は不明瞭になる。このとき，例えばセルビアクロチア語の [ovaj] と [taj] はほぼ同等の意味で（互換可能）用いられる[8)]。

Ⅱ－2－2

スロヴェニア語の指示詞 (kazalni zaimki) は 3 項対立になる。[ta]：：[tisti]：：[oni] と，対立の項のない tak, takšen, tolik, tolikšen に分けることができる。すべての形式に助詞 le が前置，又は後置される強調形がある：le–ta ; le–tisti ; le–oni ; tale ; tistile ; onile.

DIX では話者からの距離によって近 [ta] ; 中近 [tisti] ; 遠 [oni] と使い分けられる[9]。

204) Ne tista hiša na naši levi, temveč ona tam zadaj je določena na otroški vrtec.

私達の左のあの家ではなく，向こうの後方のが保育園に予定されている。

205) Tam za onimi hribi je moja rojstna vas.

あの山の向こうに私の生まれた村がある。

ANA では [ta] が中心的で，他の 2 つは補助的に用いられる。[tisti], [oni] は関係代名詞で導かれる関係文の先行詞として機能する：

206) Voliteve naj bodo poštene in demokratične ! Pod to zveneče geslo se že lep čas podpisujejo vsi - tako tisti, ki bi radi oblast samo izbirali, kot oni, ki upajo, da bodo izbrani. [DELO 17. 03. 1990]

願わくば選挙が公正で民主的であるように。この鳴り響くスローガンのもとで皆が署名するのだ，政権を選ぶのを心待ちにしている人も，選ばれることを望んでいる人も。

[oni] や [tisti] は，また，指示対象の呼称を挙げたくない，あるいは挙げたくても知らない，などの場合に用いられる[10]。

207) Kdo je ta človek ? To je tisti one, saj veš kateri, ki je včasih za sosedovo punčaro postopal.

あれは誰だい？　ありゃ，ほれ，何時だったか隣の娘に言い寄った例のよ。

208) Kdo pa hoče govoriti z mano ? – Saj veš, tisti.

一体誰が私と話したいって？ほら，あの人よ。

また，スロヴェニア語では名詞（句）を先行詞とするとき，3 人称の人称代名詞に替えて指示形容詞が用いられる[11]：

209) sl. Nekoč je živel kmet. Ta je imel tri sinove.....

cf. s–h. Jednom je živio jedan seljak. On je imao tri sina...

かつてある百姓がいた。彼には三人の息子があって……

このような指示詞の使用はチェコ語などにも普通に見られるが[12]，標準的なセルビア・クロアチア語では少ない。

Ⅱ－2－3

セルビア・クロアチア語の指示詞 (pokazne zamenice) は ovaj taj onaj ; ovakav, takav, onakav ; ovoliko toliko onoliko のように体系的な 3 項対立をなす。この言語では [onaj] と [taj] [ovaj] が主たる機能において対立する。つまり，照応機能としては後二者が中心的で前者は周縁的である。

指示代名詞 [to] [ovo] は等しく文脈照応において用いられるが，使用頻度から言えば [to] に主たる役割が宛てられていると考えられる。ここでも [to] [ovo] の表す差異は基本

的な機能のそれではなく，話者の，言及することがらに対する心理的距離感の違いとして捉えられる。即ち，[ovo] は指示対象，あるいは言及することがらについて話者が何か知っている場合，取り上げることがらが話者にとってより身近なことであることを示唆する場合用いられ易いのにたいし，[to] においてはそういった主観的なニュアンスはキャンセルされる[13)]。

Ⅱ－2－4

以上がセルビア・クロアチア語，スロヴェニア語の指示詞の体系とその機能についての概略である。これを簡単にまとめると表2のように表すことができる：

表2

DIX			s–h.	sl.	ANA	s–h.	sl.
談話の参与者に	近	話者に近	ovaj	ta	中心的	ovaj	ta
		遠	taj	tisti		taj	
	遠		onaj	oni	周縁的	onaj	tisti oni

結局，三項体系をなすセルビア・クロアチア語やスロヴェニア語でも主たる機能分布に注目すると2項の対比で表せることになる。そこでこれに，先に述べたロシア語の指示詞の体系を加えると表3の様になる：

表3

DIX		rs.		s–h.	sl.	ANA	rs.	s–h.	sl.
テクストの参与者に	近	эТОТ	話者に近	ovaj	ta	中心的	эТОТ	ovaj	ta
			遠	taj	tisti			taj	
	遠	ТОТ		onaj	oni	周縁的	ТОТ	onaj	tisti oni

Ⅲ

Ⅲ－0　前章で明らかにしたロシア語，セルビア・クロアチア語およびスロヴェニア語の指示詞がどのようにＴ・ＨＴの照応で用いられるかを以下に具体例で見ながら整理していく。

指示詞の照応機能は，ＴあるいはＨＴから次のＴへのリンクを実現する。このリンクによって，語られたＴ・ＨＴは次のＴに組み込まれる。そこでこのリンクは，(1)リ

ンクの元であるものは何か，ということと，(2)リンクの元の内容が，リンク先の文へどう組み込れるか，という２方向の関係によって捉えられる。

Ⅲ－１

まず(1)の点について考えてみる。先に述べたＴ・ＨＴの階層性と平行的に，指示詞の照応する先行表現にも階層的に次のような談話の構成単位が考えられる[14)]：

(1)直前の文のＴの一部。

(2)直前の文のＴ全体。

(3)直前の文のＴを含む複数のＴを並列的に含むＨＴ。

(4)直前の文脈の内容からの帰結として得られるＨＴ。

(5)指示詞の前後を含む文脈において語られるＨＴ。

Ⅲ－１－１

Ｔの一部とは次のものを指す：

ａ）直前の文のＴを構成する名詞あるいは名詞句，ｂ）直前の文のＴを構成する述部，述語動詞，動詞句など。

ａ）先行詞が名詞（句）である場合，３人称の人称代名詞と指示詞が照応形として可能である。ロシア語やセルビア・クロアチア語では人称代名詞が最も普通に用いられ，スロヴェニア語では人称代名詞に替えて指示形容詞がときに用いられることは先に指摘したとおりである[15)]。ところで，次の例301)－303）に見られるように指示代名詞が先行文のＴを構成する名詞（句）の指示対象の照応形となることがある：

301) s–h. Možda ste kandidat za moždani udar ? Nemojte odmahivati rukom jer ste mladi – to više nije bolest rezervirana za starije osobe.

[DANAS 10. 04. 1990]

あなたは脳溢血の候補では？とんでもない，若いのだから，などといわないで。これはもはや高齢者専用の病気ではないのだから。

[to : = moždani udar]

302) sl. Sovjetska zveza je po 73 letih imenovala svojega veleposlanika v Vatikanu. To je 53–letni Jurij Karlov, ki je magistriral s tezo Pravna vprašanja sodelovanja Vatikana v mednarodnih odnosih.

[DELO. 14. 04. 1990]

ソ連は73年を経た後にヴァチカン大使を任命した。それは53才のユーリ・カルロフで，国際関係に於けるヴァチカンの関与についての法的問題で修士号をとっている。

303) rs. Жанр антисемиткой литературы пополнился еще одним произведением. Это событие прошло бы незамеченным академическим миром, если бы не одно печально обстоятельство : автор книги сам является представителем этого мира. Книга написана математиком, членом – корреспондентом Академии наук СССР И. Р. Шафаревичем (.....) . Метод, которым пользуется Шафаревич в "Русофобии," является на самом деле пародией на логику. Зто фанатическая книга, полная произвольных утверждений, а ее "доказательства" – примеры и цитаты. [MH No. 16 22. 04. 1990]

反ユダヤ主義のジャンルにまた一つ作品が加わった。この事件は，ある嘆かわしい事情がなければ学界では注目されないままであったかも知れない。この本の著者自身がこの世界を代表する人物なのである。本をかいたのは数学者でソ連科学アカデミー準会員のI. R. シャファレヴィッチで（……）シャファレヴィッチが「ロシア嫌い」のなかで用いた手法は論理学の真似事に過ぎない。これは著者の独断に満ちた，狂信的な本で，その「証拠」というのは事例と引用である。

こういった指示代名詞の用法について本論で詳細に論じることはしないがおおよそつぎのようなことが言える：N/NP を先行詞とする指示代名詞は所謂連辞文においてのみ現われる（上例）；この制約のなかで N/NP 照応の指示代名詞は，(1)先行詞の指示する対象が談話の参与者（話者又は・かつ聞き手）にとって既知であるか，未知（未特定）であるか，という判断に基づいて用いられる；(2)人称代名詞と指示代名詞の双方が可能な場合があり，このとき指示代名詞の選択は話者の主観的判断による。(1)の選択基準が有効な文脈では基本的に指示代名詞に替えて人称代名詞を用いることはできない[16)]。

指示形容詞＋ N/NP がN/NP の照応形となる場合には指示代名詞の場合の様な構文的・語用論的制約はない。指示形容詞＋ N/NP の結合における NP についてはⅡで言及した通りである。3 人称の人称代名詞は指示形容詞（＋ N/NP）と常に互換可能ではない：

304) s–h. Da umjetnost i businnes ne idu uvijek ruku pod ruku, pa čak ni s SAD, gdje čini se, ovaj spoj najbolje funkcionira, nedavno je pokazao slučaj izdavačke kuće Pantheona.

[DANAS 22. 05. 1990]

芸術とビジネスが常にうまく手を携えていくわけではない。この結び付きが最もうまく機能しているように見えるアメリカでさえ，このことを最近のパンテオン出版社のケースは示している。

例304）では，指示形容詞＋ N のシンタグム (ovaj spoj) の先行詞は直前の文の NP そのもの (umjetnost i businnes) ではなく，テーマの一部を名詞句化したもの（芸術と商売が結び付くこと）である。ここに人称代名詞（ここでは oni）を用いると，その先行詞は「umjetnsot と businnes」としか解釈できない。これでは明らかに発話の意味が異なってくる。人称代名詞が付加的情報を含まない純粋な照応形であるのに対し，指示形容詞はこのように，適切な名詞（句）と共に用いることによって直前の文のテーマに含まれる内容を名詞（句）化して表すことができる。

b）先行文の T を構成する述部（述語動詞，あるいはそれを含む動詞句）が指示詞によって照応の対象とされる：

305) rs. Пишу эти заметки в день, когда наши хоккеисты впервые за много лет потеряли звание чемпионов Европы ..... О чем же говорилось в канун решающих поединков ? О том, что сборная СССР, увы, перестала быть безоговорочным фаворитом мировых чемпионатов, как это было многие годы. Это грустно сознавать, ведь все мы уже привыкли к тому, что уж советский–то хоккей, безусловно лучший в миру.

[MH No. 18 06. 05. 1990]

この記事を私は，わがアイスホッケーチームが久々にヨーロッパチャンピオンの座を失ったその日に書いている。決勝戦の前夜，何が話題だったか。ソ連選抜チームがこれまで長年そうであったように，世界選手権の文句無しの優勝候補ではなくなった，という話だった。これは認めづらいことだ。ソ連のホッケーが無条件に世界一だ，と言うことに我々はなれきってしまったので。

[это : =быть безоговорочным фаворитом мировых чемпионатов]

306) s–h. Tuđman je od mene tražio da zaustavim referendum. Kao da je to mogu, sve kad bih i htio.

[DANAS 21. 08. 1990]

ツジマンは私に投票をやめさせるように，要求した。まるで私にそれができるかのように。

[to : =da zaustavim referendum 私が投票を止めること]

述部が照応によってつぎの文にリンクされるとき，発言に含まれる特定の要素が除去されることがしばしばある。述部に関していえば，疑問，条件，その他の叙想表現に関わる要素や，時制，人称のカテゴリーがこれに当たる。こういったものが除去された，いわば不定形化された述語動詞，これを核とするいくつかの項からなる動詞句などは指示詞の先行表現となる。

次の例では直前の発言が条件文で，指示代名詞の受けるのはその中の命題の部分のみである。

307) rs. .....В музыке еще туда – сюда : неверную ноту сразу слышно. А в живописи ? То, что наши искусствоведы писали десятки лет, только усугубило неразбериху. Люди не знают, что хорошо, а что плохо. И даже если художник известен, это еще не значит, что он понят, что он живет в людях.

[MH No.17 29. 04. 1990]

(……)音楽の場合はまあいい，調子外れの音はすぐにわかるのだから。絵画の場合は？ 我が国の芸術研究家達は数十年に渡り書いてきたことは混乱を深めただけだった。人々は何がよくて何が悪いかわからない。芸術家が有名であるとしても，それだけでは彼が理解され，人々の中に生きていると，ということにはならない。

Ⅲ－1－2

直前の文のTとは，すでに述べたように，おおよそ表層の文の内容を命題化したものである。

308) s–h. U ovim je izborima najjača bila koalicija nezadovoljstva ljudi.
To je činjenica s kojom se moramo suočiti. I preživjeti je. Na miran način.

[DANAS 15. 05. 1990]

この選挙では人々の不満という連合がもっとも強かった。これは我々が直面し，生き延びねばならない事実である，それも落ち着いて。

309) sl. "V meni ni dovolj strasti, da bi se borila za oblast in delitev ministrskih položajev. To je poglavitni razlog, da sem se odločila za sodelovanje z Združenju za jugoslovansko demokratično pobudo (UJDI). [DELO 19. 05. 1990]

私には権力や大臣の地位を目指して争うほどの欲はありません。それが，ユーゴスラビア民主運動連合と協力することを決心した主な理由です。

Ⅲ－１－１のｂ）で言及したと同様に，Ｔ化にともなって発言の特定の要素が除去されたり，個別的事象についての発言から一般化した内容へと抽象化のプロセスが進むことがある：

310) rs. В Румынин была революция, то есть народный взрыв, который перевернул и отверг окончательно всю систему сталинского коммунизма. В других странах этот переход осуществлен с опорой на старые стрктуры, даже на старые партийные структуры. В Румынии это было невозможно. Мы все должны были изобрести с самого начала .....

[MH No. 14. 08 04 1990]

ルーマニアでは革命がありました。つまりスターリン主義的共産主義体制を覆し，否定した民衆勢力の爆発です。他の国ではこの転換は旧体制の側からの支持，党の支持さえ受けて実現されました。ルーマニアではこれは不可能でした。わたしたちはすべてを全く始めから考え出さねばなりませんでした。

ここでэтот переход の直前のＴはルーマニアで起こった革命という個別的現象である。それがつぎの文へリンクされるにともない「(スターリン的共産主義の打倒により実現された）社会の転換」という，一般的な現象に置き換えられている。さらに続く「他の東欧諸国で旧体制の支持を得た転換が実現されたこと」というＴが「旧体制の支持を得た転換が実現されること」という一般的なＴとなり「これはルーマニアでは不可能だった」と談話が続いている。名詞（句）の照応で不完全同一指示と言うことが指摘されている[17]が，これを談話レベルに拡大した，「談話における不完全同一指示」とでも呼ぶことのできる現象があると考えられる。

Ⅲ－１－３

照応関係に，直前の文の単一のＴではなく，先行する文連続の複数のＴが並列的に含まれることもある：

311) rs. – Я хотел бы честно делать свое дело. После назначения мне надо было всех хорошо узнать и добиться со всеми согласия в Совете министров, а затем получить одобрение наших программ от общества и населения. Это удалось. Думаю, что теперь я очень хорошо понимаю, каким было положение трудящихся при Чаушеску. Оно оказалось даже хуже, чем я предполагал.

[MH No.14]

私は誠実に仕事をしたいと思います。任命後，私は皆を良く知り，閣僚の合意を得，その後，私達の計画について社会，国民の賛同を得なければなりませんでした。これはうまく行きました。今にして私はチャウシェスク政権下で働いていた人々の立場がどんなだったかよくわかります。私が考えた以上にひどいものでさえあったでしょう。

312) s–h. BELRIN – Od 2. srpnja Istočna Njemačka napušta socijalizam i prelazi u kapitalizam, nastaje monetarna, privredna i socijalna unija sa SR Njemačkom. Pre-

računjavanje koliko će to koštati i analize što će to značiti za dosadašnji politički Istok i Zapad Evrope dvije su najvrelije teme ujedinjenja.

[Danas 22. 05. 1990]

ベルリン－7月2日から東ドイツは社会主義を放棄し資本主義に移行し，ドイツ連邦との通貨，経済，社会統合が始まる。これがいくらかかるかという換算と，これが今日までのヨーロッパの政治的東西にとって何を意味するのかという分析，この2つが統合のもっとも熱い話題である。

Ⅲ－1－4

先行する文の連続から導きだされる事柄が照応の先行詞となる。これは上記3が複数のTを並列的に先行表現としたのに対しTの連続から得られる帰結，あるいはそこに含まれる含意情報を先行詞とする：

313) rs. После ритуальных пешечных ходов от короля (1. e4 e5) сохранется внешне совершенно симметричная позиция. Однако это иллюзия.

Равенство возможностей только кажущееся. Белые могут избрать план атаки и немедленно начать его проведение, черные тоже могут наметить план, но должны ждать ход партнера. Так ли существенна эта разница? Бесспорно одно : в дебюте лишний ход позволяет захватить инициативу.

[Самоучитель, 28]

キングの前のポーンからの定石（1．e4 e5）の後，外見的には全く対称的なポジションが保たれる。しかしこれは錯覚だ。可能性の等しさは見かけだけのもの。白は攻撃の手を選び，すぐにこれを実行できる。黒も作戦を練ることはできるがあいての手番をまたなければならない。この違いはそれほど重要なものだろうか。間違いなくこれだけはいえる：初手では余分な一手が主導権を与えてしまうのだ。

Ⅲ－1－5

直前の文脈で語られる内容のみならず，照応形を含む前後の文脈で語られるT・HTを先行表現とする場合がある：

314) rs. "Самоучитель шахматной игры", предлагаемый вниманию читателя, кардинально отличается от других книг для начинающих шахматистов. (.....) В-третьих, и это главное, автор долго обдумывал план книги и решил, что учебник надо построить таким образом, чтобы по нему надо могли обучаться сразу оба партнера по игре : и тот, кто любит атаковать белым, и тот, кто любит защищаться черными.

[Самоучитель, 9]

読者にお目見えするこの「チェス独習」はその他のチェスの初心者のための本と根本的に異なる（……）第三に，そしてこれが一番重要なのだが，著者は長い合いだ本の構想を練り，自習書は白になって攻撃したい人，黒で守りたい人の両方が同時に学べるような形で構成されるべきだという結論に達した。

Ⅲ－2

指示詞によってT・HTは続く文にリンクされる。その組み込まれ方は具体的には指示詞の格形態によって示される。リンクされた文のなかで照応の指示詞はいかなる

格形態もとることができる。そこで果たす文法的機能は主格主語，対格目的語，あるいは斜格目的語，理由や原因，目的などを表す前置詞句など多岐にわたる。ただしN/NPを先行詞とする指示代名詞の場合，リンクされる文が常に連辞文であるということから，その格形態は主格形のみである。

リンク先の文で指示詞は，多くの場合文頭又はこれに近い位置におかれる。これはスラブ語に共通する特徴である，情報の新旧と語順の関係を反映している。つまり，新たに付け加えられる情報は，すでに語られた情報である指示詞に対し後置されることが多い。従ってこのことはまた，指示詞はいわゆる主題・題述関係を問題とする文の機能分析でいうところの主題に含まれることが最もおおい，と言うことも意味する[18)]。

基本的に，文脈照応の場合，直前の文のＴ（あるいはその一部），ＨＴを受ける。談話の中であるT/HTを飛び越して，より先行するＴ，ＨＴをを受けるような照応は原則として起こらない。ただし，直前の文あるいは文連続が明らかに挿入的なものであるときにはこのような飛び越しが生じる：

315) rs. (.....) В это время в парторганизациях уже читали доклад Хрущева – такая красная книжечка, хранили ее в парткомовских сейфах. А я еще до этого многое слышал : во время съезда был в компании, там один делегат разоткровеничался. Я не хочу называть его фамилию ..... И я попросил Олешковского – он тогда шофером работал на аварийной машине в "Мосводоканале" – взять меня на собрание в свою контору. Пришли, сели тихонько в углу, никто на нас внимание не обратил, шоферы после смены дремали, а я все запомнил. У меня память неплохая, я даже когда интервью брал как журналист, почти ничего не записывал. Видите, и сейчас, через сорок – тридцать лет, все фамилии помню.....

Я решил, что <u>это</u> необходимо передать на Запад, и выбрал для этого Джона.

[MH No.32, 12. 08. 1990]

当時党組織内部ではすでにフルシチョフの演説が読まれており，あの赤い小冊子が党委員会の金庫に保管されていました。私も色々耳にしてはいました。大会の時，その場にいたんです。そこである代議員がすっかりうちとけて何でも喋ってくれました。彼の名を言いたくはありません…そして私はオレシコフスキー，当時レッカー車の運転手として働いていましたが，彼に頼んで彼の事務所の集会に連れてってもらいました。着くと私達は隅に座りました。誰も私達に注意を払いませんでした。運転手達は交代の後で居眠りしていたし，で，私は何もかも記憶したのです。私は記憶はいいんです。記者としてインタビューを取るときだってほとんどメモなど取りませんでした。今だって，ほら，40年，30年もたった後でも名前を皆覚えているでしょう。

私はこれを是非とも西側に伝える必要があると思い，そのためにジョンを選びました。

Ⅳ

このように指示詞は談話の様々な構成要素を照応の対象とする。そこで指示詞が照応するのは談話のどの要素かを聞き手が如何に正しく把握するかが談話理解の重要な鍵となる。このためには，聞き手が先行する文連続のＨＴを適切に理解していること，リンク先の文が文法的に適格であることが最低限の条件となる。さらにリンクが適切であるために，リンクされる内容とリンク先の文の構成要素の間に何らかの選択制限が作用すると考えられる。

指示詞とその他の照応表現（人称代名詞，所有形容詞など）との機能分布もまた，明らかにされるべき問題である。その一つはⅢ－１－１で言及した，Ｔに含まれるN/NPを先行詞とする指示詞の場合であった。

また，日本語の指示詞に関して次のようなことが指摘されている：

316）弟は車を売った。そしてその金でアメリカに行った。

317）母は以前車にはねられた。その後遺症は今も続いている。

これらの例で指示詞＋名詞のシンタグムは，それぞれ「車を売って得た代金」「車にはねられた（交通事故による）怪我の後遺症」という，先行文脈で語られることの結果を先行詞とする。これが可能なのは「(車を）売る」「車にはねられる」ことが「代金を得る」，「怪我をする」ことをそれぞれ含意する，という前提に立脚していると解釈される[19]。これに加えて日本語の場合，指示詞が所有，所属の関係，即ち，スラブ語や他の印欧語ではしばしば所有形容詞や属格（生格）で表される関係をも表現するという点を考慮にいれる必要があると思われる。

これに関連して，指示詞と所有形容詞，名詞（句）の生格による表現の関係もまた，名詞句の限定表現という観点から見直す必要があると考えられる。

Ⅳ 結　　語

本稿ではスラブ語の指示詞が談話構成上果たす機能について考察した。本稿で指摘したことがらを以下にまとめる。

(1) 談話の単位として文がある。文は一つ以上のテーマ，即ち文の中核となる命題的な情報を持つ。さらに，テーマＴの上位概念としてハイパーテーマＨＴを考える。これはいくつかのＴを並立的にあるいは階層的に含む意味情報の単位である。ＨＴ自身階層的でありえ，複数のＨＴを統括するＨＴが考えられる。Ｔ・ＨＴからつぎのＴへのリンクが適切であるか否かが談話の構成上重要である。このリンクは様々な語彙，形態的手段によって表現されるがその中に照応表現も含まれる。

(2) スラブ語の指示詞は直示指示と照応の機能を持つ。スラブ語は指示詞の形態論的構成により，２項体系になる言語と３項体系になる言語に分けることができる。２項体系の例として取り上げたロシア語の指示詞は照応機能という点からみると一方の項（[ЭТОТ]）が中心的で，他方（[ТОТ] は周縁的である。３項体系になるセルビアクロアチア語やスロヴェニア語でも一つの項が照応機能の中心となりその他の項はこれに対し補助的に働く。

(3) 指示詞には形容詞，代名詞（形容詞の中性単数形と同形），副詞として機能するも

のがある。

(4) 指示詞の照応機能の特徴はＴ・ＨＴに対する照応形となることにある。この機能はＴ・Ｈの階層性と平行的にいくつかのレベルに分けることができる。即ち：①照応先がＴの一部（述語，述語動詞，これを含む動詞句：名詞句の指示対象など），②Ｔ，③直前の文のＴを含む，いくつかのＴを並立的に含むＨＴ，④先行文脈の内容からの帰結としてのＨＴ，⑤照応形の前後を含む文連続のＨＴ。

名詞（句）を先行詞とする場合，照応形には三人称の人称代名詞が用いられる。ただし，連辞文という特別な環境において指示代名詞が用いられる。また，スロヴェニア語やチェコ語では，指示形容詞が人称代名詞に代わり用いられる。

T/HT からＴへのリンクは照応形がつぎの文のなかに適切に組み込まれて実現される。聞き手側からの適切性の判断は先行文脈で語られたＨを正しく理解しているか，という点と，組み込まれた文が文法的に適格であるか，と言う点の２つを条件とするが，後者の場合，先行文脈のＴ，Ｈとリンク先の文と構成要素との間に何らかの制限選択が働くと考えられる。

—注—

1) 同一指示と言語表現の関係については中世以来様々な研究が論理学の側からなされてきた。これに関しては枚挙に暇がないのでここで言及はしない。近年の言語哲学上の論争においてはFrege, Russel, Strawson を始め, Postal, Donnellan などの研究が他の多くの研究に大きな刺激を与えたことは周知の事実であろう。Frege, G., *Über Sinn und Bedeutung*,in Geath & Black ed. Translation from the Philosophical Writings of G. Frege, Blackwell, 1952, pp.56–78 ; Strawson, P. F., "On referring" *Mind*, 1950, No.59, pp. 320–344 ; Postal, P., *Linguistic anarchy notes*, 1967. in McCawley ed. Syntax and Semantics 7, Academic Press., 1976 ; Donnellan, M., "Reference and definite descriptions" *Philosophical Review*, 1966, no.75, pp. 281–304 ; Allwood, Anderson, Dahl, *Logic in Linguistcs*, Cambridge U. P., 1977 (邦訳『日常言語の論理学』公平・野家訳, 産業図書, 1979)

2) ハイパーテーマ hypertheme という用語は例えば Daneš, F., FSP and the organization of the text のなかに見ることができる。ただしこの Daneš のなかではあるテクスト, その一部, 段落のまとまりなどが持つ, 既知情報という意味での複数の主題, と定義されている：Daně F., *FSP and the organization of the text*, Papers on Functional sentence perspectives, Janua Linguarum, Prague, Mouton, 1974, pp. 109–110.

3) Grice, H., *Logic and Conversation*, in P. Cole, J. Morgan eds. Syntax and Semantics 3., Academic press, NY, 1975, pp. 41–58.

4) Lyons によれば発話が (義務的あるいは付加的な) ストレス, イントネーションあるいはしかるべきパラ (副) 言語学的調整 (para linguistic modulation) を受けたとき (即ちこの場合指差し行為など), 代名詞は直示的と受け取られるという：Lyons, J., *Semantics*. London, 1977, p. 664.

5) これについては例えば Yule, G., "Pragmatically controlled anaphora"*Lingua*,49,1979, pp. 127–135. Pragmatically controlled anaphora では先行詞は (先行文脈になく) 状況, あるいは話者の egocentric な判断に基づいて選択される。ここでの egocentric は Chafe の言うところの "Whenever a speaker's knowledge is such that, for him, consciousness of X necessarily entails consciousness of Y, he will assume that the addressee's consciousness of X entails Y also. (話者の知識が, X を認識することに Y への認識が内包されると考えるようなものであるとき必ず, 話者は聞き手の X に対する認識もまた Y を内包すると確信する) " ような状態であるという。cf. Chafe, W., "Language and consciouness" *Language*, 50, 1974, p. 130.

6) *Краткая русская грамматика*, Москва, Русский язык, 1989 г. стр. 203.

7) *Русская Грамматика*, Praha, 1979, I. стр. 469.

8) Kostić, Đorde, *Operativna gramatika srpskohrvatskog jezika*, Beograd, Prosveta, 1987, pp. 121–124.

9) Jurančič, J., *Slovenački jezik*, Ljubljana, 1965, p. 134.

10) Jurančić, op. cit., p. 121 ; Toporišič, J., *Slovenska slovnica*, Maribor, 1984, p. 276.

11) Jurančič, op. cit. p. 121 ; Toporišič, ibid.

12) チェコ語では指示形容詞 ten が人称代名詞に代わり名詞 (句) の照応形として用いられる：.....Byl jednou jeden král a ten měl tři syny ; ただし同じ指示形容詞の tento/týž はこのような用法が許容されない：Bohuslav Havranek, Alois Jedlička, *Česká mluvnice*, Praha, SPN, 1959, 1981, c. 102 ; ten は口語ではロシア語より遙かに頻繁に用いられることも指摘されている：Viš, že ten naš kluk zase rozbil okno ? (= Ты знаешь, что наш сынок опять разбил окно?) ; *Русская Грамматика*, Praha, I. стр. 1450–51.

13) Kostić Đ, Op. cit. p. 123.

14) 文脈照応の諸タイプを形式化しようという試みは例えば Webber. B. L., *A Formal approach to discourse anaphora*, NY & London, Garland Publishing, 1979 ; 長尾真編, 『言語の機械処理』講座現代の言語, 三省堂, 1984年, 35-44頁。

15) ただし, 指示形容詞による照応がすべての格形態, あるいは談話機能のあらゆる場合に人称代名詞にかえて可能であるとはいえない。この問題はさらに例をあつめて検討を要する。

16) これについては拙論「это と人称代名詞の照応機能について」ロシヤ文学研究 No.22, 1990年で詳しく論じた。

17) いわゆる sloppy identity とよばれる現象はたとえば Postal が次の例（しっぽの落ちた鰐の話）で示している：
My tail fell off, but it grew back.
このとき it は落ちたしっぽと完全に同一ではありえない。このような不完全同一指示を説明する試みとして近年ではメンタルモデルを用いた理論が提唱されている：Postal, P., *Linguistic anarchy notes*, 1967. in McCawley ed. Syntax and Semantics 7, NY, Academic Press, 1976 ; Fauconnier, G., *Espaces Mentaux*, Edition de Minuit, 1984（邦訳『メンタルスペース』坂原　茂ほか訳，白水社，1987年）; Johnson-Laird, P. N., *Mental Models*, Cambridge University Press, 1983.（邦訳『メンタルモデル』海保博之ほか訳，産業図書，1988年）
18) ANA の指示詞が主題に含まれることはしばしば指摘される。たとえば *Русская Грамматика*, Praha, 1979. §. 1450–1451.
19) 山梨正明，「文脈と言語理解の諸相」，『日本語学』，明治書院，1987年，6巻，26-33頁。

用例出典

МН : Московские Новости（「モスクワニュース」）
Огонек（「アガニョーク」）
Бронштейн Д. И., Самоучитель шахматной игры, М. Физикультура и спорт, 1988.
Ким А., Лотос. Современная московская повесть, Московский Рабочий, 1989. т. 2
DANAS（「ダナス」ユーゴスラビア　ザグレブ発行週刊誌）
DELO（「デロ」ユーゴスラビア　リュブリアナ発行日刊誌）

Анафорическая функция указательных местоименных слов славянских (русского, сербохорватского и словенского) языков в структуре дискурса

Кэйко МИТАНИ

В настоящей работе рассматривается анафорическая функция указательных местоименных слов славянских языков в структуре дискурса. Особенно обращается внимание на то, как функционируют указательные местоименные слова как анафора для указания на содержания дискурса в реализации связности дискурса.

Предложение считаем единицей дискурса. Каждое предложение имеет по крайней мере одную тему. Термин "тема," в отличие от того же термина, который пользуется в анализе функциональной грамматики, трактуется в данной работе как пропозициональное содержание предложения и понимается как единица сведений, передаваемых одним предложением. Если тема представляет собой единицу сведений предложения, то можно предложить понятие "гипертема (hypertheme) " как единица сведений, передаваемых рядом предложений в дискурсах. Гипертема состоит из более одной темы, параллельно или иерархически расположенных в структуре дискурса. Гипертема сама может быть составляющим элементом в конфигурации другой гипертемы иерархически выше стпени. Конфигурации гипертем и связи, реализованные между темами / гипертемами определяют структуру дискурса.

С точки зрения реализации связности дискурса важную роль играет то, осуществляется ли подходящая связь между темой / гипертемой и следующей темой. Эта связь выражается различными лексическими и мофологическими средствами, между которыми находятся и указательные местоименные слова.

Указательные местоименные слова в славянских языках имеют две главных функций : дейктическую и анафорическую. В связи с морфологической системой указательных местоименных слов славянские языки разделяются на две группы : те, в которых реализуется двучленное противопоставление в онтошении на данную категорию слов, и те, в которых реализуется трехчленное противопоставление. В данной работе выбираем как предмет

рассмотрения русский из первой группы языков, а сербохорватский и словенский из второй группы языков.

В русском языке в рамках дейктической функции, основное значение которой заключается в непосредственном указании на предметы, противопоставляют указательные местоименные слова *этот* и *тот* друг другу в отношении пространственной отдаленности предмета от говорящего.

В случае анафорической функции, однако, характер двучленности противопоставления этих слов снимается, в большинстве слчаев употребляется слово *этот* как анафора, а *тот* употребляется в таком случае, когда в предложении есть необходимость отсылать к антецеденту, находящемуся в синтаксически более отдаленном положении.

В сербохорватском и словенском языках морфологическая система указательных местоименных слов обнаруживает трехчленность. В этой системе по признаку пространственной близости / отдаленности противопоставлены s–h. *ovaj–taj–onaj* ; sl. *ta–tisti–oni* таким образом, что слова *ovaj* и *ta* указывают на предметы, находящиеся поблизости от говорящего, *taj* и *tisti* на предметы отдаленные от говорящего или близкие к слушателю, а *onaj* и *oni* на предметы с точки зрения говорящего более отдаленные и от говорящего и от слушателя. Когда речь идет о анафорической функции этот трехчленный характер обоих языков редуцируется в двучленность.

В сербохорватском пользуются *ovaj* и *taj* как основные анафорические слова без диференциации в существенном значении, оставляя *onaj* маргинальным по функции анафоры. В словенском редукция трехчленной системы реализуется так, что анафорическую функцию выполняет чаше всего местоименное слово *ta*, указательные слова *tisti* и *oni* также способны выполнить анафорическую функцию, но с некоторым им свойственным значением.

Указательные местоименные слова как анафоры способны отсылать не только к названиями субстанций, а также к содержанию дискурса. Параллельно с иерархическими конфиграциями тем / гипертем анафорические отношения в дискурсах разделяются на несколько степеней. Содержания или семантические единицы дискурса, к которым отсылают указателые местоименные слова – это есть : 1) темы, т. е. чаще всего a) именные или b) глагольные компоненты, составляющие тему ; 2) тема, переданная в предыдущем предложении ; 3) гипертема, в которой заключаются несколько по связности дискурса параллельно расположенных тем ; 4) гипертема, которая получается через отношения, установленные между темами / гипертемами предыдущего ряда предложений ; 5) гипертема,

которая выходит из ряда тем не только предыдущих, но и последующих предложений.

Таким образом указательные местоименные слова указывают на разнообразные степени семантических единиц дискурса. Учитывая это явление, можем задать вопрос о том, как слушателю открывается то, на какие компоненты или какие части тем / гипертем говорящий хочет указывать в определенном контексте.

Этот вопрос надо обсуждать и с учетом грамматической и прагматической функций местоименных слов в предложениях, в которых они употребляются.

Местоименные анафорические слова для указания на темы / гипертемы в основном способны выполнить любую грамматическую функцию. При их включении в предложения, кажется, действует так называемое избирательное ограничение (selective restriction) для того, чтобы не было противоречия между содержанием, указанным анафорическим словом и составляющими компонентами предложения, в которое включается данное анафорическое слово.